

未来へつなぐ歴史と文化

まちづくりの原点は、個性ある地域の歴史と文化の中にこそ存在する。

人は生まれ育った地域の記憶を、いつまでも忘れることができないものである。地域の歴史や文化を語る文化財、つまり歴史文化遺産は、適切な保存と活用がなされることで、すばらしい輝きをもつ地域の宝になっていく。しかし、そうした歴史文化遺産は、激動する現代社会の中で、ともすれば忘れられ、失われがちであることも事実である。行政の側から言えば、文化財を保護する課題に向き合いつつ、より快適な環境づくりを探ることは、現実的には難しい。

では、具体的にどのような取り組みが考えられるか？

その答えの一つをここに実践し、見事に成功させたのが小宅小学校6年生の活動である。地域の歴史「語り人」プロジェクトと名づけられた子どもたちの取り組みは、半年間の助走を経て実にすばらしい結果を私たちにを見せてくれたのである。この感動を、ここにはばかることなく記しておこうと思う。

私たちの地域とはどのような成り立ちがあるのか、忘れられた地域の歴史を小学生が探りだす。その過程で地域をめぐり、お年寄りに尋ね、行政にも協力を求める。幅広い連携がおりなす世代交流と地域交流が始まりつつあった。それは言わば、歴史文化遺産を活かした人づくりでもあり、地域づくりのきっかけとなる活動でもあった。

小宅小学校区には、新たに市指定文化財となった一橋徳川家の庄屋を勤めた堀家住宅がある。小学生はここを学習の場と認め、発表の場を選び、実践の場と位置づけたのである。舞台は貴重な指定文化財建造物、演者は未来の担い手である子どもたち。歴史文化遺産保存活用のために練り上げられたシナリオはここに整った。

2010年11月20日と21日の2日間、たつの市が企画した堀家住宅の特別公開にあわせ、子どもたちは地域の歴史を調べあげたパネルを手作りし、ところ狭しと配置した。そして来場者に対して、6年生全員が交替で堀家のガイドを務めることになった。歴史に詳しい話の上手な選抜メンバーではなく、全員がおこなったということが実にすばらしい。傍らで聞いていたガイドぶりは、大人顔負けの丁寧さ、親切さで、気配り目配りが行き届いたものであった。来場者が感心する声は絶えることなく、公開日以降もそこかしこからその余韻が聞こえてきたほどである。

おそらくこういうことが苦手な子どももいたはずである。学校を出て地域の人たちに学ぶという慣れぬ苦労がある。それを見知らぬ人たちに伝えようとした実践はさらに難しかったはずである。

しかし、この苦労や困難を軽々と飛び越えていった子どもたちに驚く。きっと彼らにとって、かけがえのない経験となり、大きな自信になったのではないか。自分の才能や未来の可能性を見出すきっかけになったにちがいない。そう確信しながら、こうした学習の場を創造し、実現させた学校や担当教諭に感服する。また、こうした活動を支えた地域の人たちにも感謝の意を表したい。そして、最大の賛辞は、やはり子どもたち一人一人に向けてしまう。

文化財保護という難しい行政課題であるが、子どもたちの力によって、また一歩前進することに成功した。この活動は次の学年に引き継がれると聞いている。大いに期待するとともに、取り組んでくれた今年の子どもたちに、改めてありがたい言葉を贈る。みんな立派ですばらしかった。

(たつの市教育委員会文化財課 岸本道昭)